

黒部ダムをめぐる作品群

—吉村昭「水の葬列」と「高熱隧道」、そして木本正次「黒部の太陽」

高熊 哲也

1

吉村昭の「高熱隧道」(新潮社)と「水の葬列」(展望)は同じ一九六七年に発表されているが、「水の葬列」の元となった「墳墓の谷」の執筆が一九六二年に遡るので、作品の構想自体は後者が先であった。「水の葬列」執筆の経緯について、吉村は自伝的に自分の文学半生を綴った「私の文学漂流」で

ともかく原稿用紙に万年筆を動かしていなくてはならぬ、と考へ、二年半前に同人雑誌の「文学者に発表した『墳墓の谷』という二百七十枚の小説を、新ためて第一行から書き直すことに手をつけた。

それは、ダムの湖底に沈む落人の村を想定した小説であった。

勤めを辞めていた頃、その小説を書くために、わたしはダム工事現場を歩いてまわった。岐阜県白川郷では、傾斜の鋭い萱ぶきの大きな民家を見、その近くで進められているダム建設工事現場を見て歩いた。さらに妻の従兄が越冬隊長をしている黒部第四発電所の工事現場にも行って、宿舎で一週間ほどすごし、また、ダム工事の技術書も読みあさった。

それによって一応の知識を得て、かなりの日数を費やして、その小説を書き、「文学者」に発表した。それは『少女架刑』に類するものと『鉄橋』にあると言われる社会性との、自然な混淆を果たしたという愛着があった。

と、述べている。いくつかの重要な内容が含まれている。

まず、「水の葬列」では、妻を殺害した男が世間の目から逃れるように、k4ダムの工事現場を訪れるという設定だが、作品のモチーフとして黒部第四ダム工事現場そのもののみならず、岐阜県の白川郷の合掌造りとおぼしき集落が用いられている点である。掘り起こした墓から

拾った骨を白木の箱に入れ、自分たちの集落に火をかけ、さらに奥山に自分たちの転地先を求めていく落人の村は、ダム建設によって湖底に沈む実在の部落をモデルにはしていないらしいのである。実際黒部川上流には、山小屋などは点在しており、実際に湖底に沈んだものもあるようだが、人が定住するような村落は存在しなかった。このことは「水の葬列」が、黒四ダムがk4ダムと臚化されていることと合わせて、後述する「高熱隧道」が緻密な事実調査に基づいて執筆されているのとは対照的に、黒部のダムを舞台に取りながらも、歴史事象の中に人間の在りようを求める作品ではないことの傍証となることを意味する。作品世界は先に引いたように『少女架刑』に類する」もので、人の死と骨を描くことで、人間の実存的なあり方を追求する作品に位置付けられるものであった。一方吉村が作品に「社会性」を織り込もうとする兆しも見え、作風の転機に差し掛かっていたことをも物語る。

「墳墓の谷」を「水の葬列」に改稿する時期は、作家吉村昭にとつて文学活動を続けられるかどうかの岐路にあったと言つてよい。「ともかく原稿用紙に万年筆を動か

してはならぬ。」という言葉はその切迫した状況を回想しているものである。一九五九年から一九六二年にかけて、引用にある「鉄橋」ほか「貝殻」「透明標本」「石の微笑」と四度にわたつて芥川賞にノミネートされたが受賞に至らず、一方吉村の妻津村節子が一九六五年に「玩具」で芥川賞を受賞することになる。もちろん賞の受賞のみが作家を価値づけるわけではないが、自分の営為がなかなか認められない焦りも生むだろうし、受賞が職業作家として立つ契機となり、経済面での安定をもたらすという側面もある。事実吉村は、生活を支えるため家業である綿業を継いだ兄の会社で働きながら、文筆で立つべくかなり無理のある日々を送つてもいた。妻の芥川賞を機に、吉村が兄の会社を辞し、不転の決意で職業作家としての独立を目指したのは一九六五年のこと。翌一九六六年によりやく「戦艦武蔵」が世に出ることになる。「水の葬列」はその狭間を縫つて執筆された。

「水の葬列」の社会性をどこに求めるかは微妙な問題である。自分が社会的には犯罪経歴を持つ存在であるゆえに、社会から隔絶されたような山奥のダム工事現場に身を潜める主人公は、過去に向き合いながらいかに生き

ていくか、何も見い出せず漠とした状態にある。妻が不義を犯したのを許せなかった男は、その思いを整理しきれず、毆殺した妻の足指の骨粒を持ち歩いている。主人公「私」自身の幼少時の思い出を振り返りつつ、自分の中にある残忍性を自覚し、骨を持ち歩くことで「妻の死体を冒瀆しているような快感」に浸りながらも、「妻を毆殺した過去を持つ私には、無機物のような生き方しか残されていないのだとしきりと胸の中で反芻」し続けている。「私」が描かれる。その主人公の心に揺れをもたらすのが、やはり「骨」である。一つは工事現場の同僚にレイプされて自ら縊死した娘の遺骸が、そのまま放置されて骨になっていく姿。汚されたものを受け入れないという部落の掟があるらしく描かれる。もう一つはダム底に沈む自らの部落の墓地を暴き、白木の箱に詰めて転地へ持つていくさまである。前者を主人公が穴を掘って埋めてやることで、部落の中でその死が認められ、後者の白木の箱の一つとして運び去られることになる。

「私」が娘を悼み、晒された遺骸を土に戻してやる行為の動機として、枝から崩れるように膝を折った姿が許しを請うように印象され、自分の妻に重ねてとらえられ

たことをあげることができるとある。娘は自らの意思に反する形で汚されたのであり、妻のように自ら他の男に身を委ねたのではない。しかし汚されたことそれ自体が部落という社会には受け入れられなかった。その娘が縊死した姿のまま放置されることに、かえって痛ましい思いを「私」が抱いたという解き方が可能であろう。「娘の姿勢は、十分に罪を償っている。苔におおわれ、切々と許しを乞いつづけている姿勢。もし妻が、あのような姿勢をとっていたら、今の私は、妻を許さないわけにはいかない」と主人公は感じている。

「骨」は死や滅びの象徴であると同時に、人が生きて証を立てるものでもある。骨を見つめる「私」に憎悪ややすらぎやいやしといった感情をもたらしもする。それはあくまで個人の胸の奥の揺らぎにとどまるものである。しかし、そこに水没する部落を重ねていくと、重層的な作品の構造が浮かび上がる。個体としての人の死は滅びと見る他はないが、残されたものは葬送という営みで個々の心に何らかの決着を図る。縊死した娘は「私」の個人的な埋葬が契機となり、部落での葬送が執り行われ、再び共同体に迎えられることとなった。葬送はいわば人

の死を社会化する儀式として働いたわけである。さらにこの部落は、ダム建設Ⅱ電源開発という近代産業化の進展の波にさらされ、わずかな立ち退き料と引き換えにダムの底に水没していくことが描かれる。部落としての滅びである。部落の人々はその流れに背を背け奥山に落ちていき、自分たちが共同体として暮らした証は、白木の箱に詰めて運ばれるところの、墓から掘り返された骨に他ならない。さらに部落の人々は、建物に火をかけても燃え移らないようにする「自然に対する注意深さ」を持つて部落を後にする。自然に抱かれた共同体の営みを永遠に続けることを望む人々が、近代社会に背を向けた形である。このあたりが、冒頭引用した「私の文学漂流」で振り返られている、実存的な主題と社会性の混淆に関わると思われる。

もう一点指摘しておくべきは、この「水の葬列」の執筆のための取材活動で、吉村が黒部第四発電所の工事現場を訪れていることである。もちろん「水の葬列」の取材のためではあったのだろうが、黒部第四発電所は、仙人谷ダムの資材運搬トンネル（黒部川上部軌道）に接続しており、後述する「高熱隧道」の着想の原点になった

ことは間違いない。

2

立野幸雄は「水の葬列」と「高熱隧道」の関係について以下のように述べている。

「水の葬列」は「死（生）」をテーマとして、身辺的な「死」に関わる事実を想像で膨らまし、小説中に「虚構」を築こうとした。だがそれが余りにも現実離れしているので、読者はそれを幻想的として虚構小説と見なした。また、「高熱隧道」は、「死」を根底とした「戦争（戦時下）に必死に生きた人々の姿」をテーマとして、取材での証言と資料（事実）を厳選し、再構成して、その取捨選択と再構成を「虚構」の構築とした。そして読者は資料（事実）の多さと、その資料（事実）を厳選し、再構成して、その取捨選択と再構成を「虚構」の構築とした。そして、読者は資料（事実）の多さと、その資料（事実）の事件性に目を奪われ、事件報告のような記録小説と見なした。（中略）「戦艦武蔵」執筆を境にして、吉村は身

辺の体験を机上で膨らます作家から、日本全国を取材し、多くの証言者の言葉を通して事実を追究する作家に変わった。――

吉村の作家としてのありようの変化、あるいは成長を捉えた見解である。「戦艦武蔵」は日本工房から出版されていた「プロモート」の編集人であった山下三郎との縁で、「星の王子様」の翻訳で知られる仏文学者内藤濯の子息内藤初穂との出会いから出発している。日本工房に保管されていた戦艦武蔵の建造日誌を材料に小説を書くよう勧められたという。その間の事情は先に引いた「私の文学漂流」に詳しい。吉村は、戦艦武蔵の取材を進めるうちに「武蔵」の建造日誌から立ち上る熱気「私が少年時代に感じた戦時の煮えたぎっているような空気を」を感じ「私の見た戦争を書いてみようという気持」があったのだろうか、と振り返っている。吉村は戦時中、軍部の戦争遂行方針に疑いを抱くような姿勢を持たなかった。自分が結核であるために、国民の一人として戦争に直接関与するような行動を取ることができなかったことに、むしろ忸怩たる思いを抱いていたかもしれない。――終戦

を挟んで父母を相次いで失い、自身も戦後左胸の肋骨を5本切除するような大手術を受けて、かろうじて肉体の滅びと「骨」を結びつけた死生観を戦後の文学営為の出发点においたことが、「水の葬列」のような作品を生み出しもしたのである。

現代の視点から政治・経済状況を分析し、軍部の台頭と国体思想を柱に戦争にむかう日本の姿を捉えることは、もちろん重要な学術的な営みである。一方、戦争の熱に浮かされていた国民たちの実相は実相として存在した。まして吉村はそれに直接的な行動者として参加することがかなわない状況にあった。「熱気」「煮えたぎっている空気」という回想は、戦争を肯定する姿勢云々ということとは全く無縁である。進行する事実を見つめる眼を持つこと、そしてその事実の見え方は自分の立ち位置によって当然変化するものだという意識を、自らの戦後の文学営為につなげることへの意思の現れたと捉えたい。「戦艦武蔵」を挟んで、「水の葬列」から「高熱隧道」への作風の変化は、事実把握の相対性を踏まえた上で、自分の主題を作品化する方法の確立ということになる。

吉村はその事実の見え方・相対性を、文学作品の評価

という面からも、深く認識することになる。先に触れた作家活動の危機ということとも関連がある。「水の葬列」の評価をめぐって、

朝日の文芸時評を今月から担当した大岡昇平は、小説の後半がリアリティーを欠くと言い、『作者の知性を疑う』とまで言っているのに対し、毎日の平野謙は、これを今月の第一等の作品と推し、本多秋五も本紙（東京新聞・引用者注）の文芸時評で『胸の琴線にふれる』としている。三

と評価が割れたことを振り返っている。同時代評が必ずしも適切な評価を下すとは限らないし、ましてや文芸作品に関する価値判断は、「個性によるもので、（異なりを見せるのは）当然のこと」ではある。事実の見え方はあくまで相対的なものであるということへの確信の深まりが、戦艦武蔵の建造記録とそれをもとにした多くの証言を材料に小説を書く方法に吉村を向かわせたとも考えられる。材料としての事実の見え方・相対性をどのように作品化していくかに力を注ぐ創作方法が要請されたとい

うことになる。またその結果生まれた作品が読者に享受される時にも、相対的な価値判断から毀誉褒貶が生じることを受容する姿勢も同時に育まれたと言えそうだ。同人雑誌への執筆を続けながら、合評会などで議論を戦わせた経験を積んだ吉村が、読者・受賞選考者の評価に一喜一憂したとは言わないまでも、自分の作品がどう映るかに意識的ではなかったはずはない。それを乗り越えてこの創作活動なのだという、一種開き直りとも言える境地に達したのである。このことは先の評価の割れに合わせて、吉村が同人雑誌「文學者」編集長をしていた時期に、自分が没にした作品が、総合雑誌の新人賞を受賞するエピソードを交えて書いていることもその傍証となると思われる。

3

さて、「高熱隧道」は「戦艦武蔵」とは違い、材料としたのは、文献や記録よりも工事現場にいた人たちへのインタビューが中心だった。「水の葬列」の取材のため黒四ダムを訪れたことがきっかけになったと先に述べたが、妻津

村節子の従兄の小町谷武司が勤務していた佐藤工業が、その工事を請け負っていたこともあって、当時の工事関係者への取材に結びついたことを吉村自身が述べている。^四

「高熱隧道」の舞台となったのは、黒部第三発電所を建設するために建造された仙人谷ダムの資材運搬用トンネルである。戦争遂行のために軍需物資を製造するため、電源開発が国策として進められ、一九三六年八月着工、一九四一年一月完工という突貫作業で、雪崩や爆発を伴う難工事のため、三〇〇人を越える工夫たちが犠牲となった。高熱隧道という名称は、黒部川上流の仙人谷から阿曾原谷までの軌道トンネルの掘削にあたって、摂氏一六〇度を超える高熱岩盤を掘り抜けたことに由来する。ダイナマイトの自然発火のおそれにおびえながら、岩にダイナマイトを詰める穴を掘る工夫に黒部川から引いた水をかけ、さらにそのホースを持つ工夫の後方からさらに放水するエピソードは、小説「高熱隧道」で広く世に知られることになった。現在は、黒部峡谷鉄道の樺平駅に設置された縦坑エレベータをのぼり、関西電力が運行する関西電力黒部専用鉄道が敷設されていて、途中その熱気を体験できる見学のコースも用意されている。

トンネルの完成は、トンネルの貫通により、ダム建設のための資材を運び、ダムからの水路によって電力を得ることにその目標がある。仙人谷ダムの場合は国策としての戦争遂行のため、後述する黒部ダム（黒四）の場合には、戦後復興の家庭用、産業用の電力需要に応えるためと異なるのだが、いずれもその当時の技術の粋を集め、難工事を乗り切って、近代産業に寄与することになりはしない。従ってトンネルの貫通には、達成感と喜びが伴うはずであるが、「高熱隧道」では次のように描かれる。^五

交代の穿孔夫が、ズリ（爆破した岩石片）引用者注をかけたがった。鑿岩機の音が一瞬やんだが、また新たな轟音が起った。ズリの山からおりてきた穿孔夫は、二人とも仰向けに倒れた。

やがて、鑿岩機が不意にうつろな音に変わった。探り鑿のみの先端が、仙人谷側坑道の切端に突き抜けたのだ。

人夫たちは、号泣することも忘れたようにただ腰を落とし、荒く息をしているだけだった。

常に生命の危険に隣接しながらトンネルを掘る工夫た

ちは、この工事さえ終われば非人間的な環境から、一時でも解放されるはずなのである。そして貫通の日の夕刻、ダイナマイト紛失に気づいた工事の指揮者である根津（工事事務所長）は、藤平（第一工区工事課長）天知（日電工事監督主任）らとともに、工事現場を立ち去る。脳裏によぎるのは工事の犠牲になった工夫たちの無残な遺骸や、遺体に取りすがって泣き叫ぶ遺族たちの様子である。「死者の怨嗟」を感じながらトンネルを下り続ける三人を描くところで作品が終わる。やや唐突な印象を抱かせるラストシーンである。

「高熱隧道」の主題は、「死」をやりすぎし、突き上げるような人間の暗い情念・情動に身を任せる人間を描くことにある。工夫たちは高い賃金^六のために、命を賭して劣悪な労働環境に耐えるのであるが、目前の工事が進捗しないといつまでも苦難の日々が続く。従って技術者たちが苦境を乗り切るために思いつく、さまざまな技術的な工夫に半信半疑ながら従い、その成果があれば、すなわちその工夫の恩恵に与って、自分の安全が少しでも保たれ、仕事が楽になれば工事に従事する。しかし爆発や雪崩といった危機に直面すれば、もちろん工事の指揮者

たちにいらだち、憤りを胸に反抗心を抱く。一方指揮者たちは、そういった工夫たちの心情を察しながら、労働力を集約すべく工夫たちの制御を試みるのである。

根津が爆発でばらばらになった工夫たちの遺体を畳針で縫い合わせて遺族に引き渡す場面がある。藤平は根津が「遺体を抱く行為を、人夫たちに対する一種の「演技」からだと言いたかったのかもしれない。」と推測する。藤平の目には、トンネルを貫通させるために有効だと思えば、報償を出して掘進競争をあおりもするし、遺体処理を黙々と続けることで、工夫たちへの寄り添いを見せて、その反抗心や恨みを和らげもする根津の姿が「異様なもの」として映る。そして吉村は、その根津にも人目を忍んで世話する女とその子供たちの存在があり、トンネル掘削に伴う孤独をいやす時があることをさりげなく描き添える。根津が家庭的な暖かみや安寧な幸福を求めているとは言いがたい。根津がトンネル掘削以外に自分の働き場がないことを逆説的に示唆するものだと考える方が自然である。

戦争遂行という国策の陰で、トンネル貫通という（擬似）的な目的の達成のために身を投じ、坑道を掘り進む

以外にはない状況におかれた工夫たちや工事責任者たちの群像が浮かび上がる。〈疑似〉的とは、トンネル貫通はそれに携わる人間たちの達すべき目的ではあっても、なぜ自分がそこに身を投じるか、その実現によつて得られるものが何であるかが曖昧であるという意味である。工夫たちはましの多い賃金のみを、工事責任者たちは難工事を成し遂げた手柄をのみ求めたのではあるまい。自分にもたらされたある状況下において、目前の何事かに没入することでは、自分の存在のあり方を模索する他ない人間のあり方を吉村は描いたのだと考えられる。それは「水の葬列」で、娘を埋葬する男のありようや、部落を捨てて落ちていく村人たちの姿とも重なる。

この二作（「戦艦武蔵」と「高熱隧道」引用者注）を書いている時、事実というものにもたれることはせず、あくまでも小説を書かねばならぬという意識が絶えず働き、事実の取捨に専ら神経を使つた。そうした意味から、『星への旅』『水の葬列』に対する姿勢と一脈通じるものを感じていた。^七

吉村は「戦艦武蔵」を境に記録や証言を材料に事実立脚した作品を構築する方法を確立したが、事実の取捨選択や再構築を通して、そこに実存的な主題を盛り込んでいく文学姿勢は貫かれており、やはり虚構の物語を生成する小説家なのである。

4

「高熱隧道」における虚構（材料の取捨選択）に関して、どうしても避けて通れないのが、朝鮮人労働者の問題である。

難工事を支えた男たちが朝鮮から徴用されてきた人間である事実を明らかにすることは、この世紀の大事業を推進した人間ドラマに支障をきたすと吉村昭は考えた。吉村昭は「強靱な体力を駆使して遂にトンネル貫通を果たした」人間ドラマを書く場合、「朝鮮の人を労働者に使つた」というと虐使したのではないかと考えがちですが、事実は比較にならないほど高い給与が魅力となった。ともかく朝鮮の人と書く主題が妙にねじれてしまうおそれ

があるので、ただ労働者という形で押し通しました。また自分の主題を明確にするためフィクションとして書きました」（新田次郎との対談「取材・事実・フィクション―書き下ろし『陸奥爆沈』をめぐるて」一九七〇年）と語っている。（中略）トンネルを貫通する意志に取りつかれた男たちの執念、高熱の温泉が噴出し、泡雪崩で八十四名の死者を出した苛酷な自然との闘いという主題を貫通するためには、その工事に従事した半分以上の人間が朝鮮人であった事実は無用の存在と化さざるをえないと吉村昭は把握する。

引いたのは川西政明の評伝「吉村昭」である。途中の吉村の証言は孫引きの形になるが、そのまま用いる。事実関係の確認からすれば、川西の言葉に「徴用」とあるが、日本の労働力不足を補うために朝鮮人を強制的に連行する制度が整えられたのは、一九三九年七月からとされ、それまでは形式的には自由通航の形を取っていた。黒部第三ダムの工事は一九三六年～一九四〇年なので、トンネル掘削のための朝鮮人労働者たちは、その制度の改変期、すなわち過渡期的な時に就労したものとみられ

る。吉村の「虐使したのではないかと考えがちですが、事実は比較にならないほど高い給与が魅力となった。」という言葉は、この辺りの事情を指す。またトンネル工事に従事する工夫たちには、賃金面だけでなく、栄養補給や医療の面でも格別の配慮があったという記録もあり、作品にも生かされている。もつとも、日本によりよい労働条件を求めて朝鮮人労働者がやってきたのは、日本の植民地政策の結果であり、状況的な強制性は否定できない。また「工事に従事した半分以上の人間が朝鮮人であった事実」とあるが、川西がどのような資料に依ったかはわからないが、異説もある。いずれにせよ、朝鮮人労働者の存在がなければ、仙人谷ダム工事の完遂はなかっただろうとは言えそうだ。

川西の見解は吉村の証言に沿って展開されており、「主題のねじれ」として、トンネルを掘る男たちの執念や苛酷な自然との戦いを描くために、朝鮮人を登場させなかったとある。根津始め工事推進の指導者は史実としても日本人であったが、彼らがダム完成への暗い情動に突き動かされていたことを中心に据える一方、労働者にも同様の心理を見て、置かれた状況下で、目前の何事かに没

入することで自分の存在のあり方を模索する人間を描くことを主題の一つとみるとどうなるか。人間の実存的あり方という主題を前に、朝鮮人労働者を描いてしまうと、指揮者たちへの反抗心や怨嗟、また工夫に接する指揮者たちのありように別の要素が付け加わってしまう。朝鮮人労働者をめぐる社会問題性を切り離したい吉村の思いはそのあたりにあったのではないか。また、自然の苛酷さを際立たせる際に朝鮮人労働者を描くかどうかは、さほど重要ではないはずだ。

ダム建設に携わる朝鮮人を描くと、戦争遂行のためとしての国策として朝鮮人労働者たちが働かされたことが作品の前面に出てしまうマイナスがあり得たという見方が成り立ちそうだ。もちろん作品の中では国策による突貫工事の推進が悲劇を招いたことは描かれている。しかし悲劇に巻き込まれつつ、トンネル掘削に命がけで挑む工夫たちの心理や、トンネル貫通のために、工夫たちを制御しようとした工事指揮者たちの情動を描ききるために、朝鮮人労働者が多数働いていた事実は捨象された。一九六五年に日韓基本条約が発効したが、その折日韓で激しい反対運動が起こった。「高熱隧道」が発表される二

年前である。その時代背景が影響したかどうかは定かではないが、吉村が作品の純度を高めようという意識のもとに執筆を進めたことは確かである。そのために有用な事実とそうでない事実は取捨選択され、事実に立脚してはいても、あくまで小説家吉村昭は、自らが構築する虚構の物語の中に、人間の真実を浮かび上がらせる。

しかし一方、「高熱隧道」が広く読者を獲得し、しかもかなり綿密な取材に基づいて作品が構成されたことが理解されればされるほど、仙人谷ダム工事における朝鮮人労働者の存在が埋もれていってしまう結果を招く。このあたりが、史実を再構成することで作品を構築するタイプの小説についてまわる困難さであろう。

5

木本正次の「黒部の太陽」は一九六四年毎日新聞社(連載小説が単行本にまとめられたもの、映画「黒部の太陽」の上演に併せて一九六七年に講談社から再版出版されている)から出版され、一九六八年熊井啓監督(配給…日活)によって映画化されることで、広く知られることに

なった。従って小説「黒部の太陽」は「高熱隧道」よりも先の出版である。しかし「高熱隧道」には先行作として「墳墓の谷」「水の葬列」があり、「黒部の太陽」が「高熱隧道」に影響を与えたとはいえない。むしろ映画「黒部の太陽」の中に、仙人谷ダム建設のためのトンネルの難工事が織り込まれており、映画化する際に「高熱隧道」が生かされたと見るべきであろう。「高熱隧道」が戦時期に生き、死んでいった人々を営みを埋める仕事であるのに対し、「黒部の太陽」は産業技術の革新が高度経済成長を支え、人々の暮らしに豊かさや希望をもたらす確信を描いている。トンネル工事における犠牲者たちは、前者では、戦争遂行という目的の前に非人間的な労働のうち積み上げられたのに対し、後者では、戦後復興を遂げ、明るい未来を目指すための尊い礎として扱われる。

「黒部の太陽」が描くのは、言わずとした黒部第四ダム（一九五六年七月着工一九六三年六月完工）の建設である。ダム建設に先立ってやはり資材用トンネルが必要で、長野県大町市と御前達を結び、後ろ立山連峰を貫くトンネルの破碎帯突破が小説でも映画でも中心のモチーフである。主題は明確で、苦難を乗り越えて破碎帯に

挑む男達の群像劇を、具体的な数値を織り込みながら、工事の進捗を技術進歩と重ねて描くことに主眼が置かれている。またサブテーマとして、中心人物の一人、芳賀公介（関電黒四建設事務所工事担当次長）の娘が白血病に罹患し、ダムの貫通と娘の回復を重ねて祈る父親の葛藤や家族の思いの交錯が織り込まれている。トンネル掘削とダム建設が明るい時代を築くという主題に、家族愛をかさねた構想である。

木本正次が黒部第四ダムを題材にルポルタージュスタイルの小説を書こうと思つた動機は、後書きとして記された「紙碑への志」に明確に述べられている。

「黒四建設の技術の歴史を書くのは全く私の任ではありませんが、私は黒四で苦労した大勢の人たちの、人間の記録を書きたい。またこの工事で殉職した百七十一人の人々のために、紙碑を立てたいと思うのです」

ということを、ダム建設当時関西電力の会長だった太田垣士郎に直接述べて、賛同を得た経緯が語られている。そして、それが木本の恩師にあたる長谷川伸の「私の文

学の目的は、埋ずもれた人、誤解された人、悲境に死んだ人などのために、紙碑を建てることだ」という言葉に触発されたことが合わせて紹介されている。従って「黒部の太陽」に登場する登場人物達は実名で書かれることになった。

太田垣土郎は一八九四年兵庫県城崎郡城崎町（現・豊岡市）生まれで、京都帝国大学経済学部卒業後、日本信託銀行に入行し、後阪神急行電鉄（現阪急阪神ホールディングス）に移り、戦前は鉄道事業に従事した。戦後になつて一九五一年、電力界の再編成が行われ関西電力が発足すると、初代社長に就任。戦後の電力不足事情をいち早く見抜き、大規模な水力発電所の建設に踏み切った。戦後の復興が目覚しい一九五〇年代になり、関西地域の電力事情の逼迫の打開策として手がけたのが「黒四ダム」の建設である。一九六四年、自ら建設を決断したダムの完成の翌年に逝去している。享年七十歳であった。木本は太田垣の国家再建の情熱に敬意を抱き、その偉業の担い手たちの群像劇を目指したのである。

「高熱隧道」では達成感や喜びと無縁な開通を迎えたさまが描かれたが、「黒部の太陽」ではそれとは対照的に

トンネル開通の場面は明るい。確かに貫通に向けての先着競争なども描かれるが、貫通の瞬間は

意気込んで工夫たちは掘り続けた。ぽっかり穴があいて、その瞬間、冷たい風が吹き抜けて通った。信州側から始めて触れるそれは黒部の風だった。そしてその穴から矢板の頭が見えた時には、思わず歓声が、坑内にとどろいた。八

と描かれ、祝賀会が催される。すなわち、技術の粋を集めて破砕帯を抜いた高揚感に満ちあふれ、戦後復興から高度経済成長への時代を先導する自信と誇りを、技術者や労働者たちで共有する。「黒部の風」という言葉が象徴的である。

小説「黒部の太陽」の主題は、映画化されることさらに強調されることになった。いくつかのデフォルメが加えられている。九三船敏郎が演じた北川（小説では芳賀は、トンネル掘りに立ち向かう男の群像劇の中心的存在であり、一方病の二女（目色とも多）を気遣う父親像を兼ね備えた原作に沿った人物であるが、石原裕次郎が演

じた岩岡（小説では笹島）は、原作と異なつて大学を出たばかりの青年に設定が変更（実際の笹島は四〇歳くらい）されている。これは石原の俳優的魅力を前面に出し、北川の長女（榎山文枝）との恋愛を描くためと考えられる。さらに、仙人谷ダムのためのトンネル掘削における悲惨な工事をひきずつた人物として、原作にはない岩岡の父「源三」（辰巳柳太郎）が造形されている。岩岡に、新しい時代を担う青年技術者として、日本の将来を担うようなイメージを与えようと、仙人谷ダム工事の完成のためには人命を軽んじるような陰惨さに対して、黒部第四ダム工事は事故防止や安全面への配慮が最大限になされた、民主的な工事遂行であったことを際立たせた。

もう一点付け加えると、原作でのダイナマイト事故を、佐藤工業の古株社員（宇野重吉）の若い息子（寺尾聰）が事故死するエピソードとして描き、尊い犠牲者を悼む老夫婦（妻は北林谷栄）の姿をラストシーンに挿入したことが挙げられる。映画製作にあたって、三船と石原は、制作費の問題もあつて劇団民芸に協力を求め、宇野重吉も快諾したと言われている。そういった事情もあつて、民芸の主力役者を主要人物にすすめるキャストイングにな

つたということも確かである。しかし映画「黒部の太陽」は小説「黒部の太陽」の主軸に沿いながらも、恋愛エピソードや人間愛、民主的で活力あふれる人々の姿を描くことを中心に製作が進められたことがうかがえる。映画化の狙いまたその際行われたデフォルメは、記録・ルポ小説をドラマに昇華させることにあつたということになる。そして本来の小説「黒部の太陽」の主題が一層強調される結果となつたのである。

6

二〇〇二年にはNHK制作番組では、「シリーズ黒四ダム 秘境へのトンネル 地底の戦士たち」が放映され、同年のNHK紅白歌合戦に中島みゆきが初出場で登場し、プロジェクトXの主題歌であつた「地上の星」を、真冬の黒部川第四発電所地下道からの生中継で歌っている。また「黒部の太陽」は一九六九年（日本テレビ系列）と二〇〇九年（フジテレビ系列）の二度にわたつてテレビドラマ化もされている。さらにあまりテレビ放映されなかつた映画「黒部の太陽」のDVDが二〇一三年に発売

された。二十一世紀に入ってから、黒部ダム建設に関わる作品や情報が相次いで出ている状況にある。

さらには、二〇一八年には関電大町トンネル開通60周年企画として「くろよん特設ページ」が開設されている。

(http://www.kepco.co.jp/brand/kuroyon_history/)黒四ダムを中心に据えた観光開発は著しく、一九七一年に全線開通した立山黒部アルペンルートは、現在中国や台湾からの観光客を誘致して活況を呈しており、先に紹介した「高熱隧道」の見学コースも二〇二四年に一般開放される計画があると聞く。

戦後の復興の象徴的な存在とも言える黒部ダムは、今や建設後六〇年を越え、その歴史の意味が問い直されつつある。電源開発という意味では、高峰謙吉が起こした東洋アルミナム株式会社が計画した弥太蔵発電所を起点に取ると、その完成が一九二三年であり、一〇〇年近くの歴史がある。発電事業はその後日本電力・関西電力と引き継がれ、平行して黒部地域に鉄道が敷設され、現在の富山地方鉄道、黒部峡谷鉄道につながっている。「電源開発は、近代産業化に欠かせない営為で、とりわけ黒部川流域地域は、そのメッカと言ってよい。その光と陰

が凶らずも、本稿で取り上げた作品群に表れている。それは圧倒的に人間を拒むような自然に対する飽くなき挑戦でもあった。

「高熱隧道」では泡雪崩ホウが、信じがたいような威力で越冬用の宿舍が吹き飛ばすエピソードが描かれるが、「自然の力の底知れぬ恐ろしさ」「黒部溪谷の自然の力は、想像もおよばない強大なもの」といった表現が用いられている。「犠牲」を伴う「自然への戦い」は、表向き「人間の進歩」だが、その情熱が掘るものの「おさえがたい隧道貫通の単純な欲望」に支えられたものであることは既に述べた。一方、「黒部の太陽」には

『黒部には、怪我はない』

そういう言葉がある。：黒部の谷では事故とは『死』の意味であって、中途半端な怪我などはない、ということなのだ。

という一節がある。近代技術の粋を集めてなお抗いがたい圧倒的な自然の存在が厳然としてある。しかし作中の太田垣士郎は

「破砕帯では既にすべての科学的、技術的方法を講じ尽くしたというこたかね?…その方法を、やり尽くしてみようじゃないか」

と関係者たちを奮い立たせ、困難を乗り越えて戦争で失われた生活を取り戻し、希望ある未来を切り開く意義を説く。近代産業技術と自然との戦いが、そしてその支配が幸福を導くことが信じられていた時代であったということは、題材を共通にしながら、全く異なる作品世界を構築しようとした二作品に通底する。黒部川流域の電源は今も私たちの生活を支え続けている。二十一世紀を迎えて、前世紀の尊い犠牲の上に成り立ったダム建設の時代を振り返り、跡づけようという営みが先に述べた状況なのである。一方、コンクリートによる巨大建造物であるダム建設は、自然環境への影響も大きく、中国の三峡ダムや、八ツ場ダムの問題が記憶に新しいが、自然との共生を求める現代においては、反省的に振り返るべき開発形態でもある。やがては施設の老朽化や耐用年数の問題も表面化するだろう。山岳地帯を川が削り取るという、

日本の国土形成のある種の典型的な特徴を備えた富山の地勢から生まれた、ダムに関する文芸作品や、そこから派生したさまざまな人文的な営みについて、一度立ち止まって深く考察してみるべきだと考える。

【主な参考文献】

- 1 吉村昭「私の文学漂流」(一九九二年一月・新潮社)
- 2 川西政明「吉村昭」(二〇〇八年八月・河出書房新社)
- 3 笹沢信「評伝吉村昭」(二〇一七年三月・白水社)
- 4 立野幸雄「越中文学の情景」(二〇一三年一〇月・桂書房)
- 5 内田すえの・此川純子・堀江節子「黒部・底方そでいの声」
黒三ダムと朝鮮人(一九九二年二月・桂書房)

註記

- 一 参考文献4による。
- 二 参考文献2で川西は、父が戦争に負けるといったことに兄英雄とともに反発したエピソードを綴り、「この一九四一年二月八日の

記憶は吉村昭の精神の根幹をなすものである。戦争に「勝つことを強く願ってこそ勝利も得られる」と日夜刻苦勤勉した日本人像が、吉村昭が求める日本人像の根幹に位置することになり、彼の史実を求めての遍歴の旅の基本もまたここにあったからである。」と述べている。

参考文献1による。

参考文献1による。

引用は新潮文庫版『高熱隧道』（一九七五年）によった。他も同じ。

「高熱隧道」には「しかしなんといい第一の問題は、金銭ですよ」根津が、笑いながら鳴門に顔を向けた。「手当が倍ですからね、かれらはあきらかに割のいい仕事だと思っっているんです。」

という記述もあるし、その実態については当時の他の賃金や中間

搾取も視野に入れた詳しい考証が参考文献5にある。

参考文献1による。

「黒部の太陽」引用は信濃毎日新聞社刊文庫版（一九九二年）による。

映画に関する記述は「黒部の太陽」のDVD版（二〇一三年株式会社三船プロダクション株式会社石原プロモーション）による。

付録のパンフレットに樫山文枝らの回想が掲載されている。

「トロッコとめぐる90年の旅」（二〇一六年）「黒部の鉄道史」（二〇一〇年）（いずれも黒部市民歴史民俗資料館の展示解説）にこの間のいきさつが詳しい。

群峰 第1号

発行日…2015年3月7日

◇研究論文・資料

黒崎 真美

横山源之助「越中魚津にて」貧民を書く

水野 真理子

翁久允の思想と関連書籍―翁久允文庫調査を踏まえて

近藤 周吾

《資料紹介》井上靖記念館蔵 井上靖宛大村正次書簡

◇2014年度 活動記録

◇総目次『富山文学の会 ふるさと文学を語る シンポジウム報告書』

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△